

この写真は、北極圏の薄明の時間帯に現れる「地球影」と、その上に重なる「ヴィーナス・バンド」をとらえた一枚です。地平線近くに広がる濃い青から紫がかった帯が地球影で、これは地球そのものが太陽光を遮ることで生じる、巨大な“影”です。太陽が地平線下に沈む、あるいは昇る直前、地球の反対側にいる観測者からは、大気中に投影されたこの影が空の低い位置に帯状に現れます。空が一様に暗くなる前に、地球という惑星の存在感が、そのまま視覚化される現象だと言えるでしょう。

その地球影のすぐ上に見える淡い桃色の帯が「ヴィーナス・バンド」です。これは、地平線下にある太陽光が大気中で散乱され、赤系の光だけが残って帯状に見える現象で、地球影とのコントラストによっていつそう際立ちます。青紫の影と、柔らかな桃色の帯が重なり合うことで、空は現実離れした階調を帯び、昼でも夜でもない、特別な時間の存在を静かに語り始めます。

北極圏では、太陽が地平線に対して斜めではなく、ほぼ横方向に移動します。そのため、薄明の状態が長く続き、地球影やヴィーナス・バンドも短時間で消えてしまうことはありません。この写真では、ちょうどその地球影の中へ月がゆっくりと沈んでいく瞬間が捉えられています。動いているはずの天体が、まるで時間そのものを引き延ばしたかのように、静かに、確実に沈んでいく。その光景に包まれると、「静寂」という言葉の意味が塗り替えられます。もしこれを静寂と呼ぶなら、私たちが日常で感じている「普通の静けさ」は、もはや騒音に近いものに思えてくるでしょう。

(2026年2月上旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／東京から遠隔観測)

